



分断の深層

Alternative

永田円了

世界はいま、分断・二極化の方向に突き進んでいる。かつては世界平和を守る力強い代表だった米国が、自国優先主義に走ろうとしている。隣人を愛せよ、愛こそが人間に幸せをもたらす、はずだったこの大国が、トランプというエゴの権現を生み出してしまった。それはまるでパンドラの箱を開けたかのように、結局は自分さえよければそれでいいと、エゴの本性丸出しの考え方が世界を席卷しているかのようである。一体何が起きているのだろうか。

エリート層への反抗

世界の富の4分の3を、わずか10%の人々が支配し、超富裕層1%が全世界の個人資産の37%を独占しているという現実には驚かされる(日経新聞 2021/12/27)。経済の不平等、貧富の差への不満がエリート層に向けられた。米国での分断・二極化は、この負のエネルギーが暴発した結果である。トランプ氏がコトバ巧みにこの流れに乗じた。国民のために最善を尽くしてきたと自称する官僚エリートたちに対し、大衆迎合的なプロパガンダを掲げた。

専門家と称するエリート達に苛立つようになったのには理由があった。特にコロナ禍に於いてその傾向は顕著だった。専門家やエリートたちが、社会にルールや制限を設けたことで、さまざまな国で反抗が見られた。アメリカはおそらく最も強く反抗を示した国であろう。つまり国民の多くはシンプルに、エリートたちによって提供された専門性を拒否したのである。専門家たちに、家にいろ、マスクをつけろ、など感染防止のために、ああしろ、こうしろと言われることにもううんざりしたのであった。



不合理性の勝利

パンデミックであらわになったのは、専門家の合理的複雑さに嫌悪する大衆や、感情に訴えかける分かりやすさへと走る人々の姿であった。しかしこの知的エリートへの反発は現代だけのものではない。1994年に公開された映画『フォレスト・ガンブ』に、すでにその兆候が描かれていた。この映画の主人公ガンブは、極めて知能が低い(IQ75)が、純粋な心と、恵まれた身体だけが頼りの男。このシンプルさがガンブに意外な成功をもたらす。彼の人生の軌跡は、戦後のアメリカの歴史に問いを投げかけている。



しかし直観にたよるな!

知的エリートたちの唱える合理性に反発して、非合理(感情・感性)に頼る生き方。専門家がつくり上げる複雑な規制より、シンプルな直観に基づく人生。果たしてどちらの生き方が幸せへの道なのか。

分子生物学者・福岡伸一氏は「人はなぜ学ぶことが必要なのか」との問いに、次のように答えている -- 「私たちが規制する生物的制約から自由になるために、私たちは学ぶのだ」と。「ヒトの目が切り取った‘部分’は、人口的なもの。ヒトの思考が見出した関係の多くは、**妄想**でしかない」「直観が導きやすい誤謬を見直すために、(中略)勉強を続けるべきなのである。それが私たちが自由にするることなのだ」と。論理と感性、これは永遠のテーマである。

<事例>

カナダの哲学者・ジョセフ・ヒース「思考のオルタナティブ」Eテレ 2023/10/31
 1994年米映画『フォレスト・ガンブ』アカデミー賞作品賞
 「マクナマラの誤謬(ごびゅう)」NHK映像の世紀 2023/5/29
 ロナルド・ハイフェッツ教授「専門家はなぜ失敗するのか」Eテレ 2013/11月
 1975年米映画『カッコウの巣の上で』アカデミー賞作品賞
 高倉健「おふくろが法律」「恥ずかし事はしなさんな」
 ブルース・リー「Don't think. Feel!」1973年『燃えよドラゴン』
 『男はつらいよ』寅さんの原点 山田洋次監督かたる
 『釣りバカ日誌』賢さを求める社会に迎合しないハマちゃん
 福岡伸一「人はなぜ学ぶことが必要なのか」『動的平衡』木楽舎
 歌・クミコ『誕生』対置概念のない“命”を歌う

円了のホームページ: www.enryo.jp

